

 書評

加藤 敏 著

職場結合性うつ病

井原 裕

内陸型の工業地帯栃木県を拠点とする著者は、産業精神保健という新たなフィールドを見出した。

学説史的には、「職場結合性うつ病」は、19世紀英国のJohnsonによる「ボロボロ・ガタガタ病」(wear and tear malady)、アメリカのBeardによる「神経衰弱」(neurasthenia)などに起源を持つ。その本質は、「心因性」よりは、むしろ「内因性」であり、高い生命力動の担い手における「適応性軽躁状態」(p 28)が初期徴候となる。その際に生じた「獲得性の軽微な双極性」(p 28)が、睡眠による代償の許容範囲を超えると、ついには「心身の規則的なリズムの失調」(p 10)を呈して、発症する。

著者は、「あらゆる正当な精神医学は社会精神医学である」(p 168)とのScharfetterの言葉に賛同する。そして、従来の「メランコリー親和型」論の持つ性格因的なニュアンスを払拭して、病因を「時間が加速化する社会構造」(p 28)に見ようとする。治療論においては、急性期には「気分を高揚させるのではなく、興奮を鎮め、脳を休息させること」(p 23)、中長期的には「適切なリズムへ戻ろうとする内発的な動き」ないし、「自然寛解へのレジリアンスの動き」(p 87)へと働きかけることにあるとする。

本書の臨床的思索の源泉に関して、冒頭(p i-ii)で著者は、それが医局における症例検討会の診察にあったことを記している。研修医時代に評者は、検討会にデビューしたばかりの著者を拝見する機会があった。病床にあった宮本忠雄教授の代行として、花村誠一(現東京福祉大学教授)、加藤敏、阿部裕(現明治学院大学教授)の

3講師が診察を行っていた。毎週3、4名の患者が選ばれ、担当医による報告と講師診察、そして全医局員による討論が行われた。阿部隆明(現自治医科大学教授)、阪上正巳(現国立音楽大学教授)、十川幸司(精神分析家)といった鋭い論客が、熱のこもった議論を続けた。

そこでは、症例に則した考察はもちろん、「この妄想はシュレーバー症例の展開と比べてどうか」、「内省過剰だが、ブランケンブルクのアンネのような自己破壊のリスクはどうか」、「実父との間にフロイトの狼男の場合のような支配・服従関係はないか」といった検討も行われていた。すなわち、個々の患者さんを精神医学史上の代表例と比較することが当然のように行われていた。島崎敏樹以来の人間学派の伝統は、まさにここに受け継がれていた。

著者は、臨床哲学者としての一面も持っているが、その本質は臨床家、それも過酷な現場で鍛えられた辣腕精神科医である。評者は症例検討会の厳しさに早々に落ちこぼれたが、加藤教授が「まだ続けておられたのか」と知って、讃仰の念を禁じ得ない。かくも密度の濃い議論を毎週4名、年間にして200名、それを20年、4,000例に関して続けてこられた。

本書は、精神病理学の重鎮による新たな人間学である。それは、学者が書斎で作った空中楼阁ではない。4,000例の臨床経験に基づいた生きた知識そのものなのであった。

(獨協医科大学越谷病院・こころの診療科)

●A5 228 頁 2013 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税 5%) 金原出版刊